

(様式3号)

学位論文の要旨

氏名 在津 潤一

〔題名〕

Serum transferrin as a predictor of prognosis for hepatic arterial infusion chemotherapy in advanced hepatocellular carcinoma.

(血清トランスフェリンは進行肝細胞癌の動注化学療法における予後予測因子となりうる)

〔要旨〕

目的：我々は近年、鉄キレート剤デフェロキサミン (DF0) が進行肝細胞癌患者に有効であることを報告しており、鉄の制御は肝細胞癌の治療において重要な役割を果たしているといえる。トランスフェリンは生体内で鉄の恒常性を調整し、鉄キレート作用を有している蛋白であり、このことからDF0に類似した抗腫瘍作用を有している可能性があると我々は考えた。この研究は、血清トランスフェリン濃度が動注化学療法の適応となった進行肝細胞癌の予後を予測するかを検討したものである。

方法：我々は動注化学療法の適応となった44症例の肝細胞癌患者を後ろ向きに検討し、予後予測因子となりうると思われるさまざまな因子に関して、トランスフェリンを含めて検討した。

結果：全体の1年・2年・3年生存率はそれぞれ36.4%、18.2%、8.5%であり、中央生存期間 (MST) は7.0カ月であった。血清トランスフェリンが190mg/dl以上の症例はそれ未満の症例と比して良好なMST (12.0カ月vs4.9カ月) であった。多変量解析では血清トランスフェリン190mg/dl以上 (ハザード比 [HR], 0.282; 95%信頼区間 [CI], 0.132-0.603; P=0.001) ・ Child-Pugh B (HR1.956; 95%CI, 1.034-3.700; P=0.039) が独立した予後因子として抽出された。また、血清トランスフェリン高値の症例は、動注化学療法の治療効果も有意に良好であった。

結語：血清トランスフェリンは、進行肝細胞癌の症例に動注化学療法を施行する際、有用な予後因子となりうることを示唆された。

作成要領

1. 要旨は、日本語で800字以内、1枚でまとめること。
2. 題名は、和訳を括弧書きで記載すること。

学位論文審査の結果の要旨

医学系研究科応用分子生命科学系 (医学系)

報告番号	甲 第 1330 号	氏 名	在津 潤一
論文審査担当者	主査教授	松井 邦彦	
	副査教授	根部 功	
	副査教授	田邊 剛	
学位論文題目名 (題目名が英文の場合は、行を変えて和訳を括弧書きで記載する。)			
Serum transferrin as a predictor of prognosis for hepatic arterial infusion chemotherapy in advanced hepatocellular carcinoma. (血清トランスフェリンは進行肝細胞癌の動注化学療法における予後予測因子となりうる)			
学位論文の関連論文題目名 (題目名が英文の場合は、行を変えて和訳を括弧書きで記載する。)			
Serum transferrin as a predictor of prognosis for hepatic arterial infusion chemotherapy in advanced hepatocellular carcinoma. (血清トランスフェリンは進行肝細胞癌の動注化学療法における予後予測因子となりうる)			
掲載雑誌名 Hepatology Research Article ID hepr.12141. (2013年9月 掲載予定)			
(論文審査の要旨)			
<p>【背景】目的:我々は近年、鉄キレート剤デフェロキサミン (DFO) が進行肝細胞癌患者に有効であることを報告しており、鉄の制御は肝細胞癌の治療において重要な役割を果たしているといえる。トランスフェリンは生体内で鉄の恒常性を調整し、鉄キレート作用を有している蛋白であり、このことから DFO に類似した抗腫瘍作用を有している可能性があるかと我々は考えた。この研究は、血清トランスフェリン濃度が動注化学療法の適応となった進行肝細胞癌の予後を予測しうるかを検討したものである。</p> <p>方法:我々は動注化学療法の適応となった44症例の肝細胞癌患者を後ろ向きに検討し、予後予測因子となりうると思われるさまざまな因子に関して、トランスフェリンを含めて検討した。</p> <p>結果:全体の1年・2年・3年生存率はそれぞれ36.4%、18.2%、8.5%であり、中央生存期間(MST)は7.0カ月であった。血清トランスフェリンが190mg/dl以上の症例はそれ未満の症例と比して良好なMST(12.0カ月vs4.9カ月)であった。多変量解析では血清トランスフェリン190mg/dl以上(ハザード比[HR],0.282;95%信頼区間[CI],0.132-0.603;P=0.001)・Child-Pugh B(HR1.956;95%CI,1.034-3.700;P=0.039)が独立した予後因子として抽出された。また、血清トランスフェリン高値の症例は、動注化学療法の治療効果も有意に良好であった。</p> <p>結語:血清トランスフェリンは、進行肝細胞癌の症例に動注化学療法を施行する際、有用な予後因子となりうる事が示唆された。</p>			
本研究は、肝動注化学療法開始前における予後予測因子としてトランスフェリンの有用性を明らかにした論文である。よって、学位論文として価値あるものと認められた。			

備考 審査の要旨は800字以内とすること。